

加藤秀隆先生を悼む

北海道から遠く離れた京都から加藤先生との親交を懐かしみながら、先生の数学（教育）研究の一端を振り返ってみたいと思います。

はじめに加藤先生との数学上のお付き合いをはじめさせて頂いたのは、先生が北海道当別高校在勤の2004年に「数学のいずみ」に発表された「常用対数値の分数近似」という一文が発端でした。この中で常用対数の近似分数を先生なりに計算された結果から、さらなる結果について広く呼びかけられたことに偶然にも私が応じたのでした。このとき偶然にも参考となる文献を知っていた私が先生宛に私信を送り、そこから数学的なお付き合いをつい数ヶ月前までさせていただきました。このあたりの結果は2005年の記事「2の常用対数値  $\log_{10} 2$  の最良な近似分数の構成方法」にあります。またその当時に私の興味があった自然数の冪乗和についてもたいへん興味関心を持たれて、独自の結果を出されました。このあたりも先生の書かれたものがいくつか「いずみ」に残されています。

次に先生の研究について振り返ると、一言で「大胆かつ強靱」という感じを持っています。勿論、身近なお付き合いの無い状況の下で、数学的な、しかもわずかな情報からの評価は誠に失礼ではあります。しかしながら、興味を持たれた事柄への執着や集中、そして強靱な計算力には幾度となく舌を巻いた記憶があります。先生の計算力はすさまじく、到底面倒でやる気のおきないような計算をもことごとくこなしては、メールで次々と送っていただき、正直読んでついていくのがやっとというものもありました。とりわけ先生の労作である、「平方根の正則連分数に関する考察」はまさに圧巻ともいえるべきもので、「いずみ」上のレポートも VoL.11 を数え、その内容も正則連分数の縮約を柱に、和算の結果の紹介も含んだものとなっています。また一方で失礼ながら、ロマンチストであられた様にも思われます。このことは、先生のレポート上でよく見られる、謂わば「実況中継」型のありようがそれを物語っているように思います。通常の数学のレポートは、ある意味無味乾燥な事実の羅列と検証が通常ですが、先生のレポートの多くは、一言で言って、「その事実の経過の記録」であり、計算の結果と検証の記録となっています。したがってあるものは臨場感があり、あるものには紙面から先生自身の驚きや感動が感じられます。もちろんそれが良いかどうかは評価の分かれるところではありますが、学会誌などの学術文献でない体裁の下で、数学の楽しみや数学の実践を交流する場を踏まえての形式を採られていたのかも知れません。ただ、惜しむらくは、幾分言葉に頼るところもあり、数学的に読みにくいところもいくつかあったように思われますが、これも先生の文章の個性であったと思えば懐かしさを覚えます。

また、もうひとつ先生の研究を特徴づけるとすると、地元北海道にとどまらない幾人かの他府県の先生との交流をもって居られたことです。私も北海道からは遠く離れた京都から長年お付き合いさせていただいたわけですが、その他にひとつ紹介すると、昨年秋2010年の10月には千葉県高等学校教育研究会数学部会誌  $\alpha - \omega$  に柏陵高等学校 西川誠先生の「1円, 5円, 10円の3種類の硬貨で567円を支払う方法は、何通り？」というレポートが掲載されましたが、これには文中の著者の謝辞にもある通り、加藤先生が大いに関わられました。

また一方で忘れられないのは、先生は常々「いずみ」などの「レポートとかはあまりに興味に走るのはどうかと思う。」ということをおっしゃっていました。趣味に走るのも良いけどあくまでも授業やその延長線上にあって、現場に還元できるところを想定されていたように思います。先生の労作の最後の平方根の正則連分数に関する考察シリーズのおまけのレポートに「0より大きな平方数以外の有理数の平方根の近似分数や近似小数展開を作るひとつの方法として採用していただくと幸甚です」という一文があるのもこのことを裏付けているように思います。また昨年の数実研では、授業で実践されている中身のレポートを発表されたようです。最後となったレポートを拝見しますと、先生の実践の様子を垣間見る思いしました。先生の残されたレポートは現在も「いずみ」に残されていますが、多くの分野に意欲的に取り組み、大いに北海道の研究会を盛り上げて、研究会の一員としての大きな足跡を残されたのではないかと思います。

最後にプライベートな思い出ですが、2006年夏に北海道を家族旅行で訪れた際に、遠いところの急な当日の連絡に、時間を惜しまずに宿泊先ホテルまで駆けつけて頂いたことを未だ鮮明に覚えています。短時間ではありましたがお茶を飲みながらしばしの数学談義をし、さらにはお土産まで頂き、恐縮したことを覚えています。

突然の訃報に接し、言葉もないというのが率直な今の心境ですが、先生のことですからまたこちらではない、謂わば双対空間で、数学の研究を楽しんで居られるかも？という思いを馳せながら思い出の一文を捧げることとします。

2011年5月

前 京都府立北桑田高等学校 稲葉芳成